

1章 学生の元気ということ、なぜそれが求められているのか

ー学生が参画し、人生の基軸となる工学院大学を目指してー

日本の大学進学率は、2009年に50%を超え、同程度に推移している（学校基本調査）。したがって、現在の学生について考える時、それは同世代の半分程度の若者について考えることであり、将来を担う現在の学生が属する世代について、我々がどのように理解しているかを問うことに他ならない。1990年代にバブル経済が崩壊して以降、現在を含めて失われた20年とも表現される。焦燥感にも繋がるその喪失感、それまでの日本がいかに経済発展に重きをおいた社会だったかを示しているとも言われている。現在の学生が生まれ、育っている時代は、正にその失われた時代の真ただ中であり、同時にグローバル化が進行する急速な変革の時代である。

さて、今期の自己評価のテーマは、「最近の学生（若者）は元気がないのではないか」という、近年の学生に対する一般的な捉え方をどう考え、そうであるならば学生が元気になるために大学が寄与できる具体策を見つけ出し、提言することを目指しているのは明らかである。確かに、日々学生と接する中で、かつての大学生に比べれば、最近の学生は大人しくて消極的と感ずることがある。また、自分たちを生徒と言ってしまう未熟さには、もう少し自立して欲しい、時には冒険できるくらいの学生ならより頼もしく感ずるだろう、との思いをもつ教職員も多いはずである。明治20年の創立以来、125年に渡って工学の教育と研究活動を通して、日本と世界の経済成長を支え続けてきた本学の教職員であればなおのこと、そのような思いを共有している可能性が高いように思われる。

このような昨今の学生への一般的な感想や、学生が生きている上述の時代背景にあって、先ごろ興味深い論説（2013年1月14日、朝日新聞社説）があった。成人の日に当たって、新成人を迎える側の大人社会への提言である。いくつかのデータを示した上で、新成人の一般的な気質が「薄っぺらい教科書で学んだ、勉強不足のゆとり世代。内向き志向で、受け身。」などの先入観による壁を作らずに、新成人たちを受け入れようという提案であった。基礎となるデータは2万人の大学生を対象に全国大学生協連が集めたもので、「言われるほどに『ゆとり』はなかった」、「海外留学生数は5年連続して減少したものの、バブル期の倍になっている」などの他、「大半は腹を割って話せる人がおり、ケータイ依存が深まって人間関係が希薄だろうとの一般的な見方とデータの間にはギャップがある」という分析が紹介されている。

本学でも、ボランティア活動に参加する多数の学生がおり、また元気の指標になり得る委員会活動や部活動への参加率自体は低下していない。今期の自己評価は、このような実態を明かすことによって、学生が大学時代に豊かな人間関係を得て、社会での活力につながるより元気なキャンパスライフになるための多面的な提言となるだろう。若者たちは大人社会の鏡であり、学生の元気を考えることは、大人たち自身の元気を考えることとも言える。学生の成長に喜びを感じ取り、共に成長できる我々こそが、自らが考える元気な姿を学生に見せ

ることが大切になる。その意味でも、その主体である学生が大学に対する価値観を共有し、教職員と一緒に大学創りに参画できることが重要と考える。

ベースキャンプとしての家庭に次いで、大学は人生の一つの大きな基軸である。貴重な青春の一時期を過ごす場としての大学が単なる通過点となってしまうのは、学生、大学双方にとってあまりにももったいない。このような観点から、学生の元気のために大学が貢献できることのひとつとして、教職員のこのような取り組み自体を学生に向けて積極的に発信することは重要である。そもそも学生は、自分たちのためにこのような取り組みがなされていることを知る機会をほとんどもたない。リアルタイムな自校教育と位置付けることもできるはずである。